

コロナ禍が岡山大学留学生に及ぼした影響
—L-Café 留生意識調査と留学生相談室に持ち込まれた事例からの一考察—

宇塚万里子・藤本真澄（岡山大学教育推進機構）

Impact of COVID 19 Pandemic on International Students at Okayama University : A study of
the L-café International Student Survey and Cases Brought to the International Student
Advising Room

Mariko UZUKA, Masumi FUJIMOTO
(Institute for Promotion of Education and Campus Life, Okayama University)

要旨

日本での新型コロナウイルス感染症の流行により、経済、学習環境、生活、進路、精神などの多方面で学生達は影響を受けたが、中でも海外との往来が極端に制限された留学生は更に多くの困難に直面した。L-Café アンケート調査からは多くの学生が経済的困難に直面していることが分かり、5回の食料支援を実施したが、その後の追加調査では、経済的、精神的に助かったという回答が得られた。そして、留学生相談室には入管他手続きや進路・就職に関する問い合わせやハラスメント、トラブル、メンタル面での相談が寄せられ対応したが、「もっとも必要としている学生に支援が届いているか」という課題が残った。

Abstract

The outbreak of COVID19 in Japan affected students in various ways, including the economy, study environment, lifestyle, career path, and psychologically, among which international students whose travel to and from abroad was severely restricted faced various difficulties. The L-Café survey revealed that many students were facing financial difficulties, and food assistance was provided five times. A Follow-up survey indicated that the food drive helped them financially and mentally. The International Student advising room responded to inquiries about immigration, application procedures for special grant scholarships, and career counseling, as well as harassment, problems among students, and mental health issues, but the question remained, "Are we reaching students who need support the most?"

キーワード：コロナ禍、留学生支援、留学生相談

1. はじめに

2020年春より始まった新型コロナウイルス感染症の日本での広がりと共にそれに伴う行動制限や社会の変化によって多くの学生は生活様式や学習形態の変化を余儀なくされたが、その中でも、母国の家族や友人から離れて暮らし、地域社会とのつながりも薄れがちな留学生の多くは、さらなる困難があった。言語・習慣・教育的背景・価値観など、従来から指摘されていた壁に加えて、日本や母国の施策により海外との往来が物理的に制限されたことにより、新たな困難に直面していたことが多くの調査からも明らかになっている。

2020年4月に実施されたアンケート調査（近藤 2020）では、自由記述コメントから授業やアルバイト、生活、将来に対する心配、支援や母国から離れている、などのキーワードが抽出された。名古屋大学国際教育交流センター（2020）による実態調査では、経済的影響は日本人学生よりも留学生に顕著に表れており、アルバイトや仕送りの減少と同等に、オンライン授業や衛生面でのコロナ関連支出が増えていることが原因となっていることが分かる。その一方で、留学生、日本人学生共に困っている学習環境の変化を詳しくみると、留学生はネット授業自体よりも、勉強場所の確保という点で難しさを感じていた。

さらに、徐々にコロナ禍に日本全体が慣れてきた2020年12月に実施した1,000人規模の調査の結果を元に高橋（2021）は、コロナ禍での留学生の困難を、次の5つに分類している。1）講義・学習形態の変化、2）就職や進路に対する不安、3）コミュニケーション機会の不足（含アルバイトがない）、4）国や家族との関係性、5）日本に住むという不安（日本社会からのまなざし、日本の感染症対策への不安）などである。同時期に金沢大学で行われた調査では、未渡日の学生の間でも経済的な困難があったこと、経済的支援のニーズは高いものの、学生支援緊急給付金や大学独自の支援の申請率の低さが指摘されている。また、日本政府や大学に期待することとして、1）入国・国際移動に関わる支援、2）経済的支援、3）学習・留学生生活に関わる支援、4）健康にかかわる支援の順にあげられている。

コロナ禍約一年後の2021年3～5月に実施されたアンケート調査（尾崎 2021）によると、「帰国が出来ない」「親が心配している」が経済的な心配を上回り、経済の後には、進路の不安が続いている。

2022年3月からは政府の水際対策も段階的に緩和され、5月末までには新規を含めて大多数の留学生が入国できたが、一部の国と地域ではその後も出入国制限があり、2022年後期までは、学期に来日が間に合わないケースが見られた。

本稿では、このようなコロナ禍において岡山大学留学生がどのような悩みを抱えていたのか、留学生相談室に持ち込まれた事例や相談室の活動、L—Caféによる留学生支援やそのアンケート結果をもとに考察すると共に、緊急時を含めた今後の留学生支援の在り方について述べていきたい。

2. コロナ禍における留学生に関する先行研究

日本のいくつかの大学では、コロナ禍当初の混乱している中、留学生の実態を把握しようとする大人数を対象としたアンケート調査が行われたが、その後、落ち着き始めてからもインタビューや日本語ライティングなどを利用した、質的分析も行われ、個人の体験から留学生の日本留学に対する意識や支援ニーズの分析が行われている。

石鍋・安（2021）は4名の留学生を対象にPAC分析を行い、オンライン授業や人との交流の減少、一時帰国ができない状況等が留学生の感じる困難に大きく影響しているとした。そして、東日本大震災時と比較して「情報弱者である留学生」の側面は見られなかった点を挙げて、留学生の情報の入手経路がテレビからSNSへ移行し、情報入手の方法が多様化していることを一因と述べている。また、帰国制限を留学生特有の困難として挙げているが、そのような状況下でも学生達は柔軟に対応しようとする傾向があることを指摘している。

さらに、村田（2022）は日本語授業履修学生を対象とした日本語授業の活動の調査を通じて、4分の3の留学生がコロナ禍で何らかのストレス、不安、孤独を感じていたが、その一方で①自主性・自律性、②困難を乗り越えられた自信、③日本語を学んだ人とのつながりや交流による視野の広がり、④オンラインツールを使った学習スキルの習得などをコロナ禍における変化や学びとして挙げ、4割以上の学生が「強くなった」と自覚している、ことを指摘している。更に、この学生達の困難に対する取り組みや変容である「レジリエンスの表現は一様ではなく、変容のプロセスに正解はない」としている。

また、岡村（2022）は留学生の大学に対するコミュニティ感覚という観点から、5名の学生のインタビュー調査から、所属大学におけるコミュニティ感覚は、研究室や課外活動でのつながりの有無や、肯定的な評価による被受容感や自己有用感を得られているか、に深く関係していると分析している。そして、以前からコミュニティ感覚が希薄な場合や比較的高い場合は、コロナ禍の影響を受けにくく変化はなかったが、それ以外のケースでは感覚に変化や揺らぎがあったことが報告されている。コロナ禍において、大学からの支援によりコミュニティ感覚が高まったにもかかわらず、その後、物理的居場所を失ったことで孤独を感じ、大学への帰属意識も減退したケースが紹介され、課外活動や授業における周囲からの肯定的な評価や日本人学生との関係構築の重要性が指摘されている。

3. コロナ禍での岡山大学の対応と留学生の動向

3.1 2020年4月～2021年6月：国内的に不安な時期

2020年1月半ばに日本初の患者の発表があり、翌月2月にはクルーズ船の事例が確認されてから、新型コロナウイルス感染症が急速に大きく取り扱われるようになった

が、岡山県でも3月末に初の感染者が報告され、急速に警戒感が高まると共に、大学でも対策が整備された。

2020年1月末、春休み以降の中国への派遣プログラムと中国からの受入プログラムの中止が決定され、2月末には3月25日の学位授与式の中止が発表された。3月に入ると、正課外施設利用や正課外活動が制限され、通常の活動や合宿、新入生歓迎などのイベントもすべて中止となった。3月半ばには、授業担当教員に授業の開始を4月20日から遅らせること、すくなくとも5月の連休まではオンライン授業にすること、などの通知がきて、急遽、授業形態を変更することが求められた。

さらに、3月19日に、2020年前期の岡山大学交換留学プログラム（EPOK）の中止が決定した、本学に在籍している留学生は速やかに帰国させることとなった。

その後、4月初めには7都道府県に、5月4日から全国に緊急事態宣言が出され、岡山県は10日後に宣言は解除されたが、その後も県外移動の自粛や在宅勤務の依頼があった。本学は、兵庫、香川、広島などの近県から通学している学生も多いため、オンライン授業を主体とする等、慎重な対応が求められた。

また、この時期に政府からは、在日外国人を含めて一律10万円の緊急特別給付金が支給されることが発表された。

学生の大学構内の立ち入りについては、5月22日まで原則禁止されたが、大学に来れないことによりオンライン学習環境の確保が難しかったり、履修登録に不安を感じたりする新一年生が多く出てきたことから、5月22日以降は、図書館と一般教育棟の一部（オンライン授業受講のために開放された教室）の学生利用が始まった。5月25日にすべての道府県で緊急事態宣言が解除されたことを受け、6月1日より感染対策を講じた上で、対面授業を行えるようになったが、感染予防の観点からグループワークやディスカッションが多い授業の再開は難しく、2020年度前期は、ほとんど授業は非対面で実施され、授業時間に拘束されず、感染の心配もないオンライン授業に利便性を感じる一方で、登校して友達に会いたい、活動したい、という学生の声が多く聞かれた。そして、CLS（米務省重要言語奨学金）やキャンパスアジアなどの短期国際プログラムはオンラインで実施された。

岡山大学では全学生対象に学びをとめない！学生生活支援パッケージとして1）経済的支援（「学びの継続」のための学生支援給付金10～20万円、含留学生等（*1）2）授業料納付期限2か月延長 3）オンライン授業受講支援（PCやWi-fiルーター貸与）4）就職支援（宿泊施設の借上げ）5）学生相談の充実（オンライン相談）6）岡大生の食×地域飲食店の活性化支援（弁当配布）などが発表・実施された。

6月18日には、タイ、ベトナムなど4か国からのビジネストラック入国が緩和されたが、2週間の隔離生活や活動計画の提出、入国後公共交通機関以外での移動、PCR検査やアプリ使用義務など、受入れ先の企業の監督責任が入国の条件として義務化されたが、まったく同じ条件が8月以降に入国緩和された留学生にも適用された。

7月になると日本国内ではイベント開催も緩和され、8月からは国費留学生や技能実習生、在留資格保持者（レジデンストラック）などに入国許可が下りたが、上記のビジネストラックの受入れと同様の条件が大学に課されたため、体制が整った大学の国費留学生から受入れが開始した。成田空港から700キロ以上離れている本学では、空港からの移動やホテル隔離期間の対応などの課題があり、留学生が到着したのは10月以降となった。また、10月からは日本政府による入国制限措置の緩和がはじまり、私費留学生も入国可能となったが、中・長期滞在生のみで、短期の交換留学生は対象とならなかった。留学ビザの取得や飛行機の手配に時間がかかり、発表から1~2か月遅れた11月末から12月半ばに岡山に到着した。

岡山大学では、入国後の2週間の待機や公共交通機関以外でのホテルまでの移動費用の支援として、私費新規留学生、再入国留学生175名に、岡山大学都基金7万円と国際交流基金3万円を合わせて、10万円の経済支援を行った。（*2） 加えて、ホテル待機期間中の生活支援やホテル隔離や移動についてはJTBのパッケージ（*3）を利用した。

飛行機代の高騰や年末年始に隔離期間が重なった場合の不便さを懸念して、1月から入国しようと計画を立てていた学生も多かったが、変異株の発見により、2020年12月27日から翌年1月末まで再度入国停止となったのを発端に、水際対策強化が続いた。東京では、緊急事態宣言、まん延防止等重点措置がとられたものの、本学では、2021年4月の新学期には一部対面授業が復活し、学生の学内立ち入りは緩和されたが、岡山県では5月16日より6月20日まで緊急事態宣言が出されるなど、東京オリンピックに向けて水際対策強化の入国制限は続いたため、結局、2021年度前期に新規国外から入国した留学生はなかった。

私費留学生に対しては、2020年度は日本学生支援機構（JASSO）から1か月分の学習奨励費48,000円が10月と2021年1月に追加配分があり、10月は46名、1月は62名が受給できた。さらに、岡山大学独自の支援制度として、コロナ禍で家計が急変した学生・留学生に対して2021年度前後期もしくは、前期分の授業料免除申請の受付が通常授業料免除に追加されて行われたが、この制度は2023年度後期の現在まで続いている。このほか、津島キャンパス、鹿田キャンパスの大学生協の食堂では、JA岡山中央会から岡山県産米の寄付を受けて、2021年2月8日~10日の3日間ライスの無料サービスが実施された。また、6月には「コロナがなんじゃ！Win-Win学生プロジェクト」の一環で岡山大学学都基金の援助のもと、地域の飲食店から10日間で4000食の応援メッセージ付きのお弁当を購入し、学生に無料配布されたが、15分で終了するほどの人気であった。

3.2 2021年7月~2022年2月 国内的には落ち着くが、水際対策強化期間

2021年初夏には、ワクチン接種が始まり、本学でも大学拠点接種が始まったが、岡山県では8月20日よりまん延防止等重点措置、8月27日から9月12日まで緊急事態

宣言が出され、その後、まん延防止等重点措置が9月末まで続いた。しかし、ワクチン接種が始まったこともあり、指定された施設での保留期間の短縮など水際対策は徐々に緩和されていたが、オミクロン株の発見により、11月30日から再度新規入国が停止となり、2月末まで続いた。しかし、1月17日には、対面授業や研究の必要に迫られている国費留学生に対して例外的に1月末から入国を認める、との発表があり、2月には外国人の新規入国者の一日あたりの入国者が5,000人まで引き上げられ、2月25日には新規入国のオンライン申請が開始された。

2020年夏以降、非常事態宣言やまん延防止等重点措置が発表されたが、ワクチン接種がはじまったことにより、国内的には落ち着き大学内の活動指針はコロナ禍1年目と比べて、対面活動が主流になるなどかなり緩和された。その反面、水際対策の強化に呼応して、学生ビザ発給に時間がかかったり、価格の高騰やキャンセルなど航空券の手配が極端に困難になったりということが重なり、2021年後期も新規留学生の来岡はほとんどなく、多くの留学生はオンラインで授業や研究室活動に参加していた。そのような状況下の留学生を励ます意味も込めて、11月末には学長より「日本への入国をまっている留学生の皆さんへ」のメッセージがホームページに掲載され、その後も2022年1月半ば、3月初めに発信された。

日本学生支援機構（JASSO）の学奨励費特別追加採用は、2021年10月から年度末までの6か月間のみ給付であったが、19名が追加採用された。

3.3 2022年3月～9月（渡日開始時期）：未渡日学生の入国完了

2022年3月からは、新規入国者の上限が段階的に引き上げられた。3月初めには在留資格を受けている留学生15万人のほとんどが5月末までに入国できるような仕組みづくりをする、との政府の発表があった。それと共に、指定国（感染リスクが低い）からの入国者に関しては、72時間以内の陰性証明やワクチン接種証明により隔離期間の短縮や免除の緩和を行っている。そして、6月からは添乗員付きツアーの観光客を含む、1日あたりの入国を2万人まで引きあげられた。

岡山大学でも、入国制限で不自由な思いをしていた中・長期の私費留学生は、4月の新学期開始に合わせて来日することができ、一部の学生は3～6週間遅れたが、6月中頃までにはほとんど学生が大学に到着できた。EPOK交換留学プログラムも2022年4月からは再開し、学期初めには在籍していた15名の学生の多くがオンラインでの授業参加であったが、6～7月になると半分以上の学生が岡山に到着することができた。

3.4 2022年9月～2023年5月：平常化

コロナ禍によって日本に入国できなかった学生達は、2022年夏までに入国できたが、2023年5月に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行するまで、大学内ではコロナ禍の行動制限が続いた。

具体的には、2022年前期は多くの授業やゼミがオンラインで実施され、特に日本語

の授業は、来日できる時期や待機期間が出身国によってそれぞれ違うことから同期型オンラインであった。また、寮においても談話室やセミナールームなどの交流スペースの使用が禁止・制限されていた。2022年後期からは感染防止対応やリスク予想をしたうえで、多くの授業が対面形式となった。教室内換気、手指の消毒、マスク着用義務の他、学生同士の間隔や座る位置などにも配慮義務があった。2023年3月13日には、厚生労働省よりマスク着用は個人の判断、ただし、医療機関や混雑した場所、重症化リスクの高い人と接する機会の多い場所では着用を推奨、発表があり、本学でもそれに準じた指標が出されたが、大学内では多くの学生がマスクを着用していたため、母国では半年前からマスク着用をしていない欧米からの留学生のほとんどがマスクを着用していた。

4月の新学期からは換気や消毒などの対策は取られたものの、教室定員はコロナ禍前にもどり、オンライン授業を実施する際は、オンラインの方が効果的であることが認められた場合のみ実施する、という許可制となった。さらに、それまでは、コロナ疑い（発熱、体調不良など）の場合も、コロナり患あるいは濃厚接触者扱いの公欠が認められていたが、2023年春学期からは、コロナ感染あるいは濃厚接触者のみ公欠となった。その一方で、体調が悪い場合は対面授業には出席しないように、と特別の配慮をする授業担当教員が多かった。

2022年10月には、JA岡山よりコロナ禍や各種食品値上げの中で困っている大学生を岡山県産米と果物で応援しようと2年目の寄付を受け、大学生協食堂3日間、8,400人分ライス無料提供が行われた。また、2022年11月には大学祭も3年ぶりに対面で開催することができ、学生生活のほとんどがコロナ禍前にもどってきたといえる。

2023年5月8日に5類感染症に移行した後も建物内ではマスク姿の学生が半数近く見られたが、換気、消毒などの対策以外は、コロナ禍前のクラス定員にもどり、気温が高くなるにつれて、マスク着用者も減少してきた。また、留学生寮内の交流スペースの使用も認められた。

岡山大学生の派遣については、2022年9月に工学部独自の3か月海外短期留学HUGプログラムやEPOKが始まっている。

表1 コロナ禍での岡山大学と日本社会の動き

日付	岡山大学	日本社会
2020年1月末	春休み中国短期プログラム中止	岡山県初コロナ感染者
2月末	卒業式中止発表	
3月	正課外活動制限	
	授業開始時期、オンライン授業切替を発表 EPOK中止決定、留学生帰国	
2020年4月	入構制限、オンライン授業	7都道府県緊急事態宣言

5月4日～14日		岡山県非常事態宣言
5月22日	入構一部解除（図書館、オンライン授業用教室）大学院生 一部対面授業再開	10万円特別給付金発表 緊急事態宣言解除（5/25）
6月	学生生活支援パッケージ 学生応援プロジェクト弁当配布	タイ、ベトナムビジネストラック入国緩和
7月		東京オリンピック
8月		イベント開催緩和 国費、技能実習、レジデントトラック入国許可
2020年10月	留学生到着	JASSO 私費留学生学習奨励費（1か月）
12月27日～1月末		入国停止（変異株出現） JASSO 私費留学生学習奨励費（1か月）
2月	2022年前期授業料免除申請募集 無料岡山県産ライス（3日間）	東京：緊急事態宣言、まん延防止等重点措置
2021年4月	一部対面授業、学内立入緩和	水際対策強化
5月16日～6月20日	学生応援プロジェクト弁当配布	岡山県緊急事態宣言
2021年7月	ワクチン大学接種	岡山県まん延防止重点処置、緊急事態宣言
8月20日～9月末		
9月	交換留学派遣再開（欧州）	
10月	ほとんど対面授業へ、感染対策緩和	JASSO 私費留学生学習奨励費（半年分）
11月		入国停止（オミクロン株）～2月末まで
2022年2月		一部、国費留学生入国許可
2月25日		新規留学生オンライン申請開始
2022年3月		入国緩和発表（5月末までに留学生15万人が入国できるような計画）
4月	対面交換留学再開	

6月～7月	日本語授業すべてオンライン 留学生到着	
2022年10月	日本語授業すべて対面 超短期研究生受入 無料岡山県産ライス（3日間）	
2023年3月 5月8日 夏	短期語学研修等再開	マスク着用選択 感染症5類に移行

4. L-Caféによる留学生支援

4.1 アンケート調査

コロナ禍初期は学生の大学内への立ち入りを強く制限され、国際教育と交流のソーシャルラーニングスペース L-Café も大きな影響を受けたが、入構制限とともに学生の利用がなくなった2020年6月、いち早く私費留学生対象にアンケートとインタビューを実施し、留学生の状況を把握しようと努めた。

アンケート実施時点で岡山大学に在籍している私費留学生は604名であったが、そのうち大学院生が約60%、学部生が約20%、研究生が約10%、その他10%以下となっている。このうち、16%にあたる94名の留学生の回答が得られた。その中で岡山にいる学生は98%の92名であった。したがって、在籍学生のうちには春休みに一時帰国したまま、日本に戻れなくなってしまった学生も含まれることが予想される。また、回答した学生のうち、何らかの形で奨学金をもらっているのは約40%の学生であることがわかった。

また、コロナ禍で特別に困難だと思うことについては、経済的困難が77%（55人）と最も多く、精神的に困難37%（26人）、学業面での困難28.2%（20人）、生活面17%と続いた。

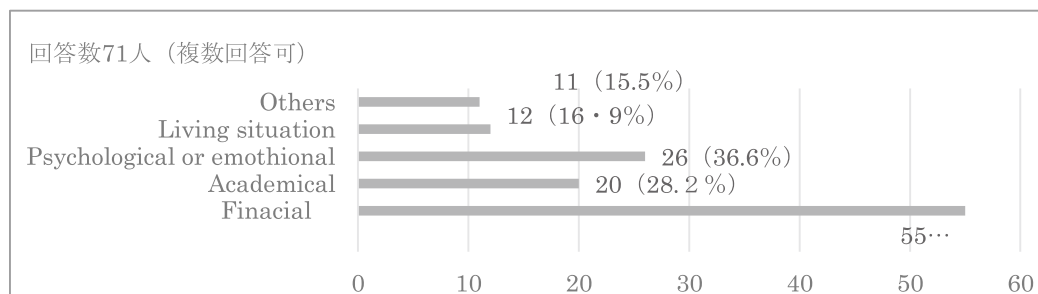


図1 コロナ禍で特別に困難だと思うことについて

さらに、支援のニーズに対する問いには、経済的支援83%（58名）で圧倒的に多く、日本人学生との交流36%（25人）、学業面での支援31%（22人）、心理的な支援

23%（16人）と続いた。この他、地域社会とのつながりや旅行にいきたい、日本語学習などの意見も聞かれた。

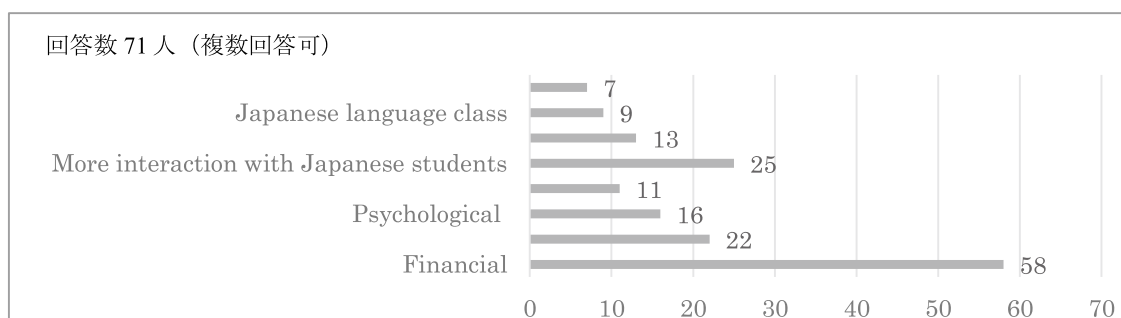


図2 受けたい支援について

自由記述では、アルバイトがなくなって生活費や授業料など経済的に困っているといた多くの嘆きの声に交じって、他に帰国に際して PCR 検査や飛行機の手配が必要だが、それが難しく帰国の見込みがたたない、或いは、コロナ禍で学業が思うより進まず、卒業できなくなりそう、就職活動をどうしたらよいか、など卒業間近の学生からも心配の声があがっている。経済的な困難はそれぞれの学生によって多様化していることが分かる。中でも、家族帯同の私費留学生や、以前から経済的に余裕がなかった学生の場合は、コロナ禍により状況が深刻化していることが伺える。

さらに、授業やゼミのオンライン化、不必要な会話をしない、大学になるべく滞在しないように、といった感染対策下で、日本人学生と同様、他の学生との交流がなくなり孤独を感じたことや、日本語を話す機会が減り、日本語学習や日本留学のモチベーションが極端に低下していて、トリップなどのストレス発散や精神的なサポートを求めている学生が多いことが分かった。

そして、より詳しいインタビュー調査からは、母国の家族が大変心配、外国人であるために「どうして帰国しないのか」「コロナを持ち込んだのではないか」などの差別的な態度を取られる、アルバイト先などでは親切にしてもらっているのに、大学の対応は冷たい、と感じているといった留学生特有の声が上がった。

4. 2 L-Caféによる支援

4. 1で述べた調査結果を元に L-Café ではどのような支援ができるか検討された。状況が刻々と変わっていく中、PCR 検査や飛行機代、夏休みの農作業アルバイトなど新しい情報を探して学生に案内したり、授業料についての相談会を開催したりした。

初級者向けの日本語レッスンをオンラインで提供した。さらに、2020年9月から地域との交流が再開できるようにフィールドトリップにおける岡山大学 BCS（*4）を作成し、感染予防対策について細かい規則を設けた。地域受け入れ側の関係者は60代前後の高齢者も少なくないため、トリップ2週間前からの体温チェックや当日の抗原検査を義務化するなど、通常のトリップの2倍の手間や検査キット購入などの追加費

用が必要となった。

また、前述の調査実施と同時期に「留学生のまちづくり事業」で10年前からL-Café学生達と交流を続けてきた岡山県矢掛町江良地区から「留学生が困っているなら、江良のお米を食べて、少しでも元気になってほしい」との暖かい支援が届いたことを皮切りに、L-Caféでは、2020年は4回、2021年にも1回、食料支援が行われた。

特に、2020年11月に実施された支援はL-Caféが岡山大学教職員に呼びかけて寄付を募っての実現であったが、敷地内に附属病院がある鹿田キャンパスでは、嚴重な感染対策や独自の指針があり、多数の学生が集まることが予想される食料配布の裏には、関係各所との細かい調整が必要となった。

大変ありがたいことに、メディアなどで岡山大学における留学生への食糧支援が取り上げられると、L-Caféと以前からつながりのあった地域や企業からの支援の輪が広がり、お米の他、手軽に食べられる加工食品や野菜など寄付を頂き、津島や鹿田キャンパスだけではなく、倉敷や三朝の研究室の留学生にまで配布することが出来た。

表2 L-Café主催の食料支援

日付	内容	参加学生数
2020年6月	矢掛町「輝け！江良元気会」より寄付されたお米1トンの配布	約130名
同年11月	岡山大学教職員からの寄付された300点ほどの常温保存のできる食品の配布（津島キャンパス、鹿田キャンパス）	約100名
同年11月	株式会社林原より寄付されたご飯、パン、ラーメンなど2400点とトレハロース1200個を配布	約150名（含倉敷地区）
同年12月	岡山県勝田郡勝央町、農学部付属山陽圏フィールド科学センターから寄付いただいたお米180Kg、野菜500点、お餅1俵、卵、野菜パック100人分等、年末年始冬季休暇の前に配布	約200名（含倉敷、三朝地区）
2021年11月	株式会社林原より寄付されたご飯、パン、ラーメン、和洋菓子など1508点を配布	約200名（含倉敷、三朝地区）

さらに、L-Caféでの食料支援は話題を呼び、上記以外にも輪が広がり、他の地域や団体からも困っている留学生へ、と本学へ寄付が寄せられた。2020年12月には**近隣の岡山市青年会議所**から、水害で被害を受けた真備町の農家の方をはじめとする有志の方からいただいた、岡山の**新米300キロ**、150パックが寄贈され、2021年6月にもYMCAせとうちから食料や清涼飲料水の寄付をいただき、留学生に配布することができた。

4.3 フォローアップ調査

2020年10月になると、3.1に述べたようにコロナ感染症の状況も大きく変わり、大学から発表される活動指標もそれ以前に比べると緩和されたため、3回目の食料支援後に、フォローアップのアンケート調査を行った。2021年11月1日時点で私費留学生は529名在籍していたが、この時期に新規で来日した私費留学生は皆無だったので、10月入学の留学生のうち、かなりの人数は自国でオンライン授業参加をしていることが予想される。アンケートは165人（回答率31%）であった。

このうち、162人の学生が岡山在住であり、34%の学生が何らかの奨学金を受給しているが、64%にあたる108人の学生は現状に困難を感じていると答えている。困難の内容については、81%（90人）の学生が経済的な問題をあげ、精神的な問題45%（50人）、学業面での問題34%（38人）と続く。

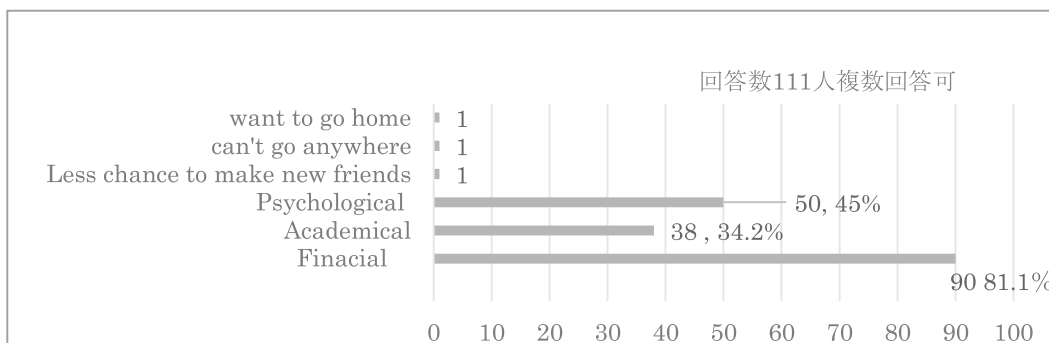


図3 コロナ禍で困難に思っていることについて（複数回答可）

また、必要としている支援については、経済的支援が80%（111人）と大きく、その次はフィールドトリップ29%（40人）、精神的支援25%（35人）、学業面での支援24%（33人）6月に多かった日本人との交流は22%（31人）と順位が下がった。

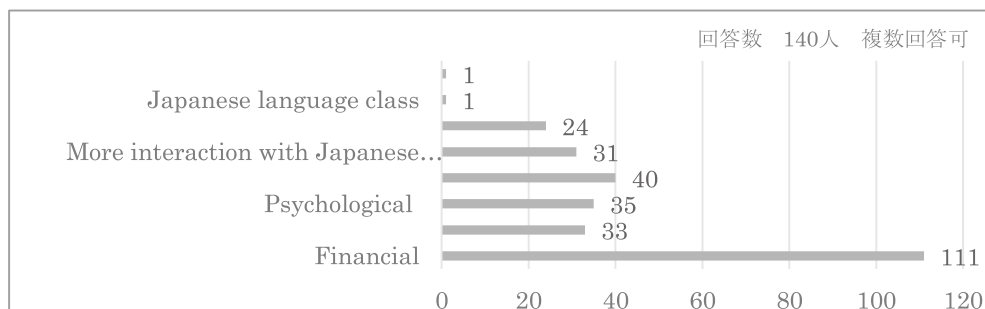


図4 受けたい支援について（複数回答可）

次に、食料支援の参加についての質問では、24%以上の参加率がある一方で、50%の学生が食料支援に来ていなかったことが明らかになった。

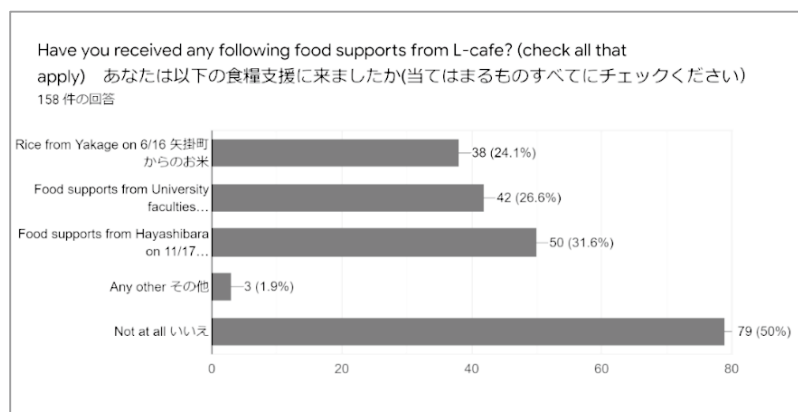


図5 参加した食料支援について（複数回答可）

そして、食料支援がどのように役立ったか、という問いには、経済的と答えた学生 64% (72 人) に次いで、精神的 50% (58 人) と答えた学生がいた反面、全く役にたっていないと答えた学生も 9 人 (8%) いた。自由記述では、経済的に困っている、という切実な訴えが激減し、感染について心配もあったが、支援に関する感謝が目立ったが、参加しなかった理由については、「時間が合わなかった」が圧倒的に多かったが、「もっと困っている人にあげてください」「日本人学生にもあげるべき」という意見もみられた。数回の食料配布は、勿論、それだけで留学生達の経済的困難を解決するわけではない。しかし、皆が大変な思いをしている時に、地域の人に母国を離れ一人で困難や寂しい思いをしているだろう、と思いやってもらえている、と実感できることは嬉しかったのではないかと推測される。多くの学生が丁寧にお礼を言って、笑顔で帰って行った。

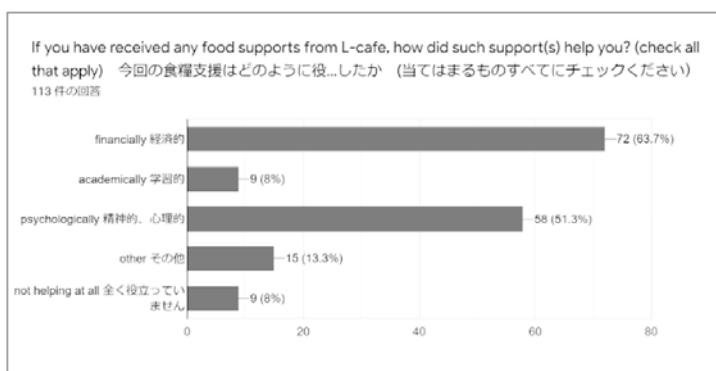


図6 食料支援は
どのように役立ったか (複数回答可)

5. 留学生の在籍状況

国外移動が困難だった 2020~2021 年に実施された L-Café の食料支援に来られた学生は、2020 年度以前の入学生、日本国内の語学学校や他大学からの新入学生、あるいは、岡山大学の学部や研究生から大学院に進学した内部進学生であり、キャンパス近くに住んでいる学生だったが、その他の学生の多くは、渡日する機会を待ちながらも母国でオンライン授業受講をしていた学生である。

毎年、5 月と 11 月に報告される、外国人留学生在籍状況を見ると、春入学の学生はコロナ禍前 2019 年と比較すると、2020 年に落ち込みはあるもののその後は増加傾向にあることが見える。秋入学の学生に関しても短期プログラムが一斉に中止された 2020 年には大きく落ち込んだものの、2022 年にはコロナ禍前を上回っている。その一方で、半年以下の超短期を含む通年の在籍者数は 2020 年に 644 人に激減した後、毎年 100 人ずつ回復し、2023 年度 5 月は大幅に増えているが、コロナ禍前の水準にもどるにはあと数年はかかることが予想される。

つまり、本学の国際学生交流は未だ、コロナ禍からの回復途中であると言える。

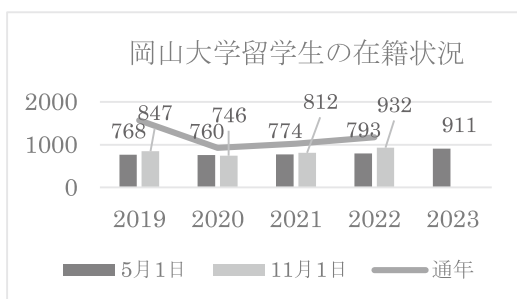


表3 2019年度との比較

	5月1日	11月1日	通年
2020	-8	-101	-644
2021	6	-35	-546
2022	25	85	-403
2023	143		

図7 留学生の在籍状況

学期毎に国際部留学交流課によって開催されている新入留学生のための生活オリエンテーションの形態と参加者数は以下のとおりである。コロナ禍においても、留学生は岡山に到着して2週間以内に在留届の住所変更や健康保険証発行などの公的手続きをする必要があった。このため、例外的に国際部事務室に来ることが許可されていた。必要な書類を受け取り、オンラインにてオリエンテーションを視聴した後、確認シートをオンライン提出する、という流れであった。しかし、必要最低限しか大学構内に滞在できないような感染対策が取られていたため、他学生との交流もほとんどない寂しい留学生生活のスタートとなった。

表4 新入留学生のための生活オリエンテーション

	2019	2020	2021	2022	2023
前期 (形態)	280 対面	N/A オンライン	60 オンライン	275* ² オンライン	160 対面
後期 (形態)	290 対面	115* ¹ オンライン	27 オンライン	207 対面	約250 対面

*1 ほとんどが12月から1月に渡日した学生

*2 すでに在籍していたものの渡日できていなかった学生が多かった

6. 留学生相談室に寄せられた相談

6.1 相談件数

コロナ禍であった2020年4月から2022年3月の間に寄せられた相談件数の合計数は表4のとおりである。留学生相談室の相談件数は、留学生総数や留学生の特性とは関係性があまり認められないとはこれまでも言われてきたが、コロナ禍でも同じことが言える。SGU目標達成に向けて全学で留学生受入数を増やそうと努力していた2018年から2019年にかけて、通年の留学生数は1,318人から1,447人へ大きく増えたが、相談数は571件から561件に減っている。しかし、2020年に相談件数が増加した

ことはコロナ禍の影響が考えられる。特に、2020年4月はコロナ感染症の社会的関心が高まったと同時に、新学期開始でもあり、授業が急にオンライン化した時期であった。同年の12月、1月はちょうど、一時的に入国制限が緩和されて、国費や在学生在が入国した時期でもある。水際対策は日本国内外のコロナ感染の状況に左右されることが多かったが、岡山大学の留学生相談もその影響を少なからず受けている。

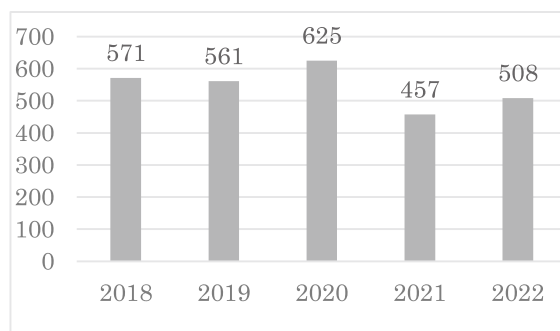


図8
留学生相談合計数

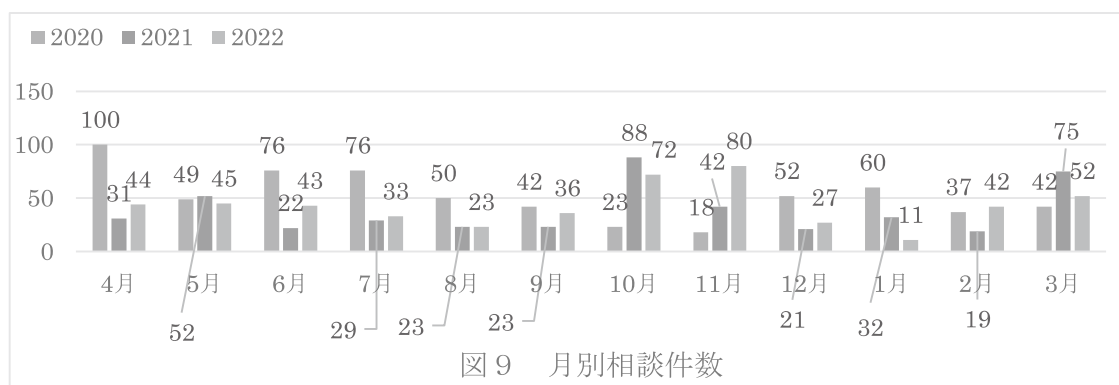


図9 月別相談件数

6.2 相談形態

コロナ禍における留学生相談室の最大の変化は、学生が気軽に大学構内に入出入りできなくなったために、ウォークイン相談を中止して、事前予約制としたことである。大学からの要請で相談を行うに当たっては、感染予防の観点から対面で相談を受けた学生に素早くかつ確実に連絡がとれるような体制を確保する必要があった。近年は日本の電話サービスを持たない留学生も増えてきたために、メールでの連絡が主となっていたが、大学付与のメールアドレスを常時確認しない、メールアドレスが不明瞭だったり、間違っていたりするために連絡がつきにくいことも珍しくなかった。しかし、予約制になってからは相談以前に必ずメールのやりとりがあるため、フォローアップ等がスムーズになった。その反面、「ちょっと聞きたいことがある」と立ち寄った学生が、実は別の悩みを抱えているといった「ついでだけでも大切な相談」や今はまだ問題だと自覚していないが、後から問題になりそうな予備軍相談について学生と話す機会が極端に少なくなってしまう。予約制は、学生、アドバイザー双方にとっ

て効率的だが、見過ごされてしまった点もあったのではないかと推察される。

予約制への変更の他、相談の手段のもう一つとして、Zoom や Teams を利用したオンライン相談も開始した。2019 年度は全体の相談の約半分が対面、34%がメール、12%が Facebook, LINE であったが、コロナ禍では、以下の図に示す通り、メールの割合が大きかった。Zoom による相談は、感染を心配する学生、来日できずにいた学生、医歯薬系の大学院生からの要望があり、コロナ禍 1 年目は 27 件実施したが、2021 年は 13 件、2022 年は 5 件、と対面授業が増えるにつれて、減っていった。

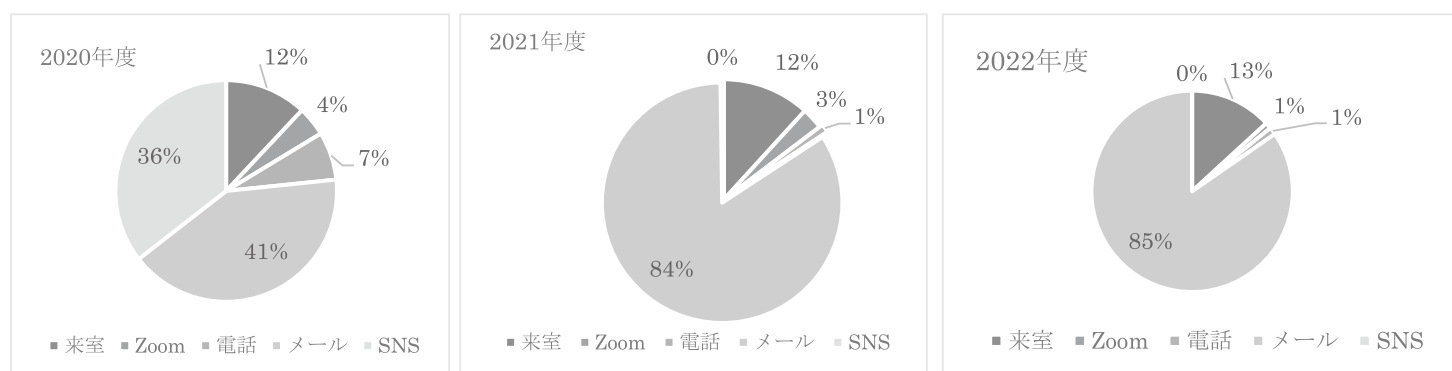


図 10 2022 年～2023 年度 相談形態の割合

6. 3 相談事例

(ア) 2020 年春～2021 年 6 月

2020 年春からワクチン接種がはじまる 2021 年 7 月までの 1 年半の間は、水際対策の情報も頻繁に更新され、先行きが見通せない状態不安な時期だったこともあり、在留資格の延長、入国手続き、来日の時期、帰国手続きなどの入国管理手続き関連のメールによる問い合わせが一番多かった。

二番目に多かったのは、日本政府からの緊急特別給付金や学費免除の学生支援緊急給付金関連や奨学金手続き関連の質問である。こういった情報は留学生相談室の Facebook などでも案内したが、具体的な申請方法や条件はホームページを読んで理解し、各自で申請する必要があったが、HP を頻繁に確認していないために、情報を見逃す、気が付いた時には締切間際というケース等もあったが、その当時は受付窓口である学生支援課も学生からのメールや電話、窓口対応に追われ、多忙を極めていた。留学生からの英語や不明瞭な日本語に対応するのは非常な手間だったのではないかと推察される。そのような混乱の中、情報がよく理解できていない留学生からの問い合わせが留学生相談室にも寄せられた。しかしながら、各々の学生によって状況が異なるため、まずは書類一式を持参で支援課に相談に来るように、とのことだった。

その次に多かったのが、コロナウィルス感染症予防についての問い合わせである。2020 年夏までは感染症自体の情報も様々あり、マスクが不足していたが、医歯薬学研究科を卒業した元留学生のアドバイザーあてに、同国の学生を中心に、SNS 経由で多

くのマスクがどこで入手できるか、マスクがないがどう消毒したらよいか、子供がかかったらどうしたらよいか、など細かい質問が寄せられた。

進路や日本での就職活動の相談については、コロナ禍前からの傾向として、卒業半年以内での問い合わせが増えつつあったが、卒業まで1年以上ある大学院生からの問い合わせが増えた。コロナ禍を経験して、日本就職の希望が高まった学生もいるが、日本語習得が壁となっている。

この他、コロナ禍特有の相談としては、「早く帰りたいけれども帰れない」「このままで卒業できるか心配」「卒業できなかつたら奨学金が止まってしまうのでどうしたらよいかわからない」「オンライン授業がよく理解できない」「自宅のWi-Fiが壊れた」などの相談がオンライン授業やゼミに慣れた秋学期にも寄せられた。

2020年4月の直前には、春休みを利用して帰省際に、留学生の国でコロナが流行していることを理由に大家さんからアパートを退去してほしい、と言われて困っている（岡山県宅建協会に相談し、大家さんの経費持ちで、新学期が始まる前に新しいアパートへ無事引っ越しできた。）などの相談も寄せられた。

(イ) 2021年7月～2022年2月

日本でワクチン接種が始まった2021年7月から翌年3月までの間については、最も多く寄せられた相談は、進路、就職ある。授業料免除や給付金申請も落ち着き、国内では行動制限が緩和されたことが加わり、留学生活に慣れてきたのと同時に、卒業が近くなってきて進路について考える学生や、留学前は学位取得後は帰国を考えていたものの政情不安や母国のコロナ禍事情からできれば日本にもう少し残りたい、という学生が一定数見受けられた。東南アジアで感染が広がった2021年夏から秋にかけては、医療が行きわたらず、「自分だけ安全な日本にいて申し訳ない、家族が心配」という切実な声もあった。

そして、このわずか半年の間に、指導教員によるハラスメントの相談が数件、寄せられた。いずれも、ワクチン接種や特別奨学金というコロナ禍の特有さがあったが、元々、学生と教員の間でコミュニケーションがうまく取れず、お互いの認識や理解にギャップが生まれ、徐々に問題化していくという過程は、コロナ禍以前と変わらなかった。ハラスメントケースは通常、留学生が言語の壁や習慣の違いのために研究室内で孤立していたり、第三者が間にはいっても教員の期待と学生の理解のギャップが埋められなくなると修復が難しい。留学生の場合は休学を選ばず、退学して帰国するケースが多くみられるが、新たな研究室が見つけて卒業する場合もある。

他にも対面相談が可能となったこの時期には、ハラスメントを訴えるまでではないが、指導教員とのコミュニケーションの取り方に悩んでいる、周りの学生と自分を比べて気分が滅入ってしまいがち、健康に自信がない、友達が引きこもっている、などのメンタルヘルス面での相談が時々寄せられた。

(ウ) 2022年3月以降

母国でオンライン授業を受けていた多くの学生が次々に岡山に到着し、対面授業も復活したこの時期から以前のような、コロナ感染症自体と関わりのある相談はほとんど見られなくなった。件数として多いのは進路・就職関連である。その次は日本語学習に関連するものであり、「日本語ライティングを日本人の友達に見てもらおうように指導教員に言われたが、頼める友達がない」「日本に留学しているのに、コロナ禍で日本語を使わず、留学前より日本語が出来なくなった」「就職に必要な日本語を勉強したが、研究が忙しくて授業を取っている暇がない」「研究室の日本人学生と会話できず、自分だけ孤立している」などである。コロナ禍で失った留学の時間を取り戻そうと焦っているようにも見受けられた。そこで、教養教育の「留学生支援ボランティア実習」授業を履修している学生に声をかけて、ライティングチューターを募ったり、学生同士の勉強会の活動を始めたりした。

さらに、この時期は学生同士の大きなトラブルケースが2件あったが、そのうちの一つはSNS問題が浮き彫りとなった。よくあるアパートの住人トラブルだったが、SNS上での喧嘩のため、エスカレートしていった。SNSコミュニケーションは、学生同士で簡単につながる便利なツールとして5、6年前から常識となりつつあり、今では、大学を超えた大きなグループやアパート単位のものなど、実際には会ったことはなく、SNSだけの付き合い、ということも珍しくない。コロナ禍以前には、為替詐欺の相談に来た学生がいたが、コロナ禍でオンラインコミュニケーションが活発化するに伴い、ニュースで耳にするようなトラブルが学生の周りでも起こりうることに心配される。

この他、「コロナ禍でオンラインゼミや授業に参加していた時は大丈夫だったが、いざ対面になると自信がなくなった」「母国で想像していた留学生活とは違ったので専攻を変えたいが、指導教員が怖くて言い出せない」など、Withコロナになって自由に外出できて明るさを取り戻した学生がいる一方で、新たに悩みを抱えた学生からの相談が寄せられた。

留学生相談室では、こういった留学生が少しでも前向きになれるよう、Facebookを活用して週2回学生の身近な話題を発信したり、「留学生支援ボランティア実習」履修の学生による買い物支援や対面交流イベントを学期ごとに3~4回実施した。児島湖畔ゴミ拾い、朝市、美術館、Caféめぐり、日本語勉強会、書道教室など、多様な企画があり、参加した留学生及び、企画した日本人学生から好評だった。

また、2022年前期にはワークスタディ学生の協力を得て、オンライン交流会「岡山RF」を3回シリーズで開催し、部活紹介やクイズ、名所案内などの新しい試みも行った。（後期からは対面イベントが可能になったため、ボランティア実習学生達のイベントに引き継いだ。）

しかし、これらのイベントに参加した学生は、留学生総数から見るとほんの一部にすぎない。コロナ禍で、新入オリエンテーションがオンライン化され、留学生相談室

についてよく理解できていない学生がいることが予想されるが、実態は不明である。従来、留学目的や経済基盤、日本語習得度合い、背景文化、母国での地位などによって多様化している留学生の実態は、コロナ禍のような非常時にはより把握し難い。「本当に支援を必要としている学生と相談室が繋がれているのか、援助要請がうまくできずに、一人で耐えている学生はいないか」という疑問が残ってしまった。

7. おわりに

以上、新型コロナウイルス感染症が留学生に与えた影響を留学生受入状況に沿って4つの時期に分け、L-Café のアンケート調査や留学生相談室に持ち込まれた相談事例を中心に考察してきた。L-Café のアンケートはコロナ禍の早い時期に実施されたが、多くの留学生が経済的困難への支援を求めている。それに次いで、精神的困難、学業面での困難を挙げていたが、L-Café の食料支援によって、一時的にでも経済的、精神的に助かった、と学生が感じたのであれば、「岡山大学は留学生を応援しているよ」というメッセージを送れたという点で成果があったと言える。

また、その後 JASSO 学習奨励費の追加募集やアルバイト収入減などによる授業料免除申請の枠の拡大などの政府や大学からの経済的支援策が動き出したことも相談室に経済的困難についての相談があまり寄せられなかった一因であろう。

そして、留学生相談室には1) プラクティカルな問い合わせ（入管や補助金申請、進路・就活など）と2) ハラスメントやメンタル、学生間トラブルなど（コロナ禍特有かつ、解決が困難な相談）が寄せられた。岡山大学留学生相談室では、心理カウンセリングサービスは提供していないため、学生の意向を尊重しながら必要に応じて保健管理センターに紹介することになっているが、約半数の学生は、話をただけで満足しているようであった。L-Café 調査や相談室の相談事例は他大学における調査結果ともおおよそ一致しているが、入管や申請手続きの問い合わせが多かったことから、本学では、留学生は依然として情報的弱者の側面（石鍋・安（2021））を持っていることも分かった

さらに今後は「支援をもっとも必要としている学生にリーチするにはどうしたらよいか」という点について、学生交流やその他の対面活動を通して見識を広げながら、L-Café や相談室を軸に、国際部や各部局等との連携・協力体制を深めつつ、検討していくことが重要である。

【注】

1. 学生生活支援パッケージの経済的支援は①アルバイト収入の減少により困窮している学生に3万円給付（全体225人中、留学生104人）②同窓会から留学生への生活費負担軽減のための支援一万円（599人）③私費留学生への渡日支援金10万円（88人）など
2. 国費留学生に対しては、日本政府からホテル待機や移動手段など全学補助が支払われた。
3. JTB パッケージは、ホテル費用とその間の見守りに成田空港からホテル間のハイヤ

一料金を加えたもので、2020年12月までのキャンペーン期間は、一人当たり13,9260円、2021年1月からは通常料金となり、152,260円。

4. BCS (Business Continuity Strategy) : 業務継続戦略。活動制限指針として授業や研究、課外活動の際に作成されることが義務づけられていた。

【参考文献】

- 近藤 佐知彦・石倉佑季子・中野遼子（2020）「報告：学校および留学生・日本人学生が直面した留学生交流に関する玲奈2年の課題（4月末から5月にかけてのアンケート調査報告）」グローバル人材育成教育研究 第8巻1号 pp70-76
- 名古屋大学国際教育交流センター（2020）「COVID-19にかかわる留学生の実態調査」https://ieec.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/corona/20200529_1_Fact-finding%20survey%20of%20NU%20COVID-19_ja.pdf（2023年8月31日閲覧）
- 高橋朋子（2021）「“オール近大”新型コロナウイルス感染症対策支援プロジェクト」におけるアンケートならびにインタビュー超過の結果から一留学生在が抱えた困難と課題」近畿大学教育論叢 33巻第1号 pp173-195
- 岸田由美・陸晴子・薛芸「調査報告：コロナ禍における留学生の経験と困難-金沢大学留学生を対象としたアンケート調査の結果から-」金沢大学国際機構紀要 第4巻 pp75-91
- 尾崎寛幸・久野弓枝（2021）「調査報告：新型コロナウイルス感染症が外国人留学生に与える影響とサポート体制の検討-札幌大学の外国人留学生を対象にして-」札幌大学研究紀要 第1号 PP207-230
- 石鍋浩・安龍洙（2022）「COVID-19感染拡大下における留学生の大学生活について- PAC分析を用いた質的研究-」茨城大学全学教育機構論集グローバル教育研究 第5号 pp95-106
- 村田晶子（2022）「コロナ禍の「日本留学」-外国人留学生の孤独とレジリエンス-」多文化社会と言語教育 Vol 2 March 2022 pp1-15
- 岡村佳代（2022）「コロナ禍を経験した留学生の所属大学に対するコミュニティ感覚」聖学院大学論叢 第35号 第2号 pp37-53
- NHK 新型コロナと感染症・医学情報
<https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/policy/#mokuji139>（2023年9月20日閲覧）
- 岡山大学ホームページ「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）への対応について」
<https://www.okayama-u.ac.jp/tp/profile/aboutcoronavirus.html#more>（2023年9月20日閲覧）
- 岡山大学ホームページ 新着ニュース「日本への入国を待っている留学生のみなさんへ」
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id10694.html（2023年9月27日閲覧）
- 藤本真澄（2020）報告書：コロナ禍における岡山大学の私費留学生実態調査-彼らが直面している問題点-
- 岡山大学ホームページ 新着ニュース「矢掛町江良集落「輝け江良元気会」より学生支援のためのお米1トンを寄贈いただきました」
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9465.html
- 岡山大学ホームページ 新着ニュース「教職員がコロナ禍で困窮する留学生に食料支援」
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9766.html
- 岡山大学ホームページ 新着ニュース「株式会社林原から、留学生へ食糧支援をいただきました」
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9794.html（
- 岡山大学ホームページ 新着ニュース「勝田郡勝央町の皆さまから留学生へ食糧支援をいただき、農学部附属山陽圏フィールド科学センターの野菜と合わせて留学生に配布しました」
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id9913.html
- 岡山大学ホームページ 新着ニュース「株式会社林原から、昨年引き続き留学生へ食糧支援をいただきました」
https://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id10682.html（いずれも2023年9月27日閲覧）。